

## 日本語の句読表示について(Ⅱ)

山井 徳行

### Sur le choix des signes de ponctuation dans la langue japonaise (Ⅱ)

Noriyuki YAMAI

(注)この論文は平成六年三月に発行された『名古屋女子大学紀要 第四十号 人文・社会編』に発表した拙稿『日本語の句読表示について(Ⅰ)』の続編である。

#### 第四章 句点・読点とピリオド・コンマの比較

日本語を横書きにするとき、句点の代わりにピリオドを読点の代わりにコンマを使うことが容易になされている。そこで、句点とピリオドとは同じ機能を持っているのか、読点とコンマは同じ機能を持っているのか、と問うことが出来る。ピリオド・コンマに関しては大修館英語学事典(昭和61年8月版)の句読法の記述(982から986ページ)を参考にして比較してみよう。まず、その句読法の定義が参考になるので引用してみたい。

<引用F>

話し言葉(speech)では言語音(speech sound)の連なりに強勢(stress)、音の高低(pitch)、調子(tone)、休止(pause)が加わり、意味を表現する。書き言葉では文字に加えて符号などによって、これらを出るだけ表記し、文や語句の切れ目、続きなどを示し、文の文法的・論理的構成を明確にし、意味の表現や、理解の助けにする。この符号を使った表記方法を句読法(punctuation)という。使われる符号を句読記号(punctuation mark)または、句読点(punctuation point)という。句読法は書き手の好みによって多少異なってくるが、句読記号の種類とその基本的な使用法を以下に記す。(982ページ)

ここで注目したいのは、句読法が「文の文法的・論理的構成を明確にし、意味の表現や、理解の助けにする」という指摘である。言語によるコミュニケーションの目的は相手に自分の言いたいことを伝えることである。そのために、言語の規則である文法に注意して、共通の基盤の論理を尊重しながら文章を書くのである。これは本多が『日本語の作文技術』で主張していることである。そのようなことを頭に置いて分析に入ろう。

句点は文の終止を示す記号である。平叙文でも命令文・疑問文でも終止を示す。疑問文・感嘆文の場合には疑問符・感嘆符をつけることも行われるけれども句点でも差し支えない。そして、句点にはそれ以外の機能はない。半濁音の丸はその位置からして句点と混同されることはない。それに対して、ピリオドはどうか。これも文の終止を示す機能が主である。しかし、平叙文・命令文に付くのが普通で、疑問文・感嘆文の終止を示すためには用いられない。その上、省略記号としても、「8 pm」や「M. A.」、「Feb. 5」のように使われる。第三章でも論じたよう

に、ここからピリオドの終止符としての脆弱さが出てくるのだけれど、それは次の文の始まりが大文字でもって示されるという、日本語にはない大文字と小文字の区別によって補われている。そして、日本語ではセミコロン・コロンが行われないから、句点は欧米語でそれらの記号(特に、セミコロン)が担っている役割をも果たしていると言えよう。シロテンを普及させようという意図も句点の重圧を軽くするところにある。それにより、表現の幅を増やそうということになるだろう。

読点の使い方に関しては第一章で、本多の二つの原則と一つの準則に連鎖防止の二つめの準則を上げた。読点の使い方に関して定説がないというのが現状であろう。これから日本語学者による研究が待たれる分野である。それで、現時点で最も体系的で説得力があると思われた本多説をこの論文では採用した。それと比較しながら、コンマの用法を見てみよう。

コンマの説明として「話し言葉での修辞上・発声上の休止などを示すのに使われるが、必ずしもこれと一致しない」とある。それは論理性を尊重したり誤解を防ぐために打つコンマがあるということで、コンマも本多の言う構文上の読点と同様に明確な理解を助けるための道具ということである。そこまでは二つには共通性があると言ってもよい。もっと具体的に見るために、幾つかのコンマの用法を選び、それに付加されている例文を選んで翻訳しながら、コンマと読点を比較してみよう。

コンマは「文の構成部分を区切る」と説明されているが、これは文の構造を明確にするために必要なところに打つ、と解釈すべきであろう。

(1)は「文頭にある副詞節・副詞句を区切る」とあり、例文は次の通りである。ただし、日本語訳は著者のものである。

As the years passed, a restlessness began to grow upon her. —Lytton Strachey

(年が経つにつれて彼女の不安は強くなり始めた。)

我々の原則からいくと、「年が経つにつれて」の後に読点は必要ない。英文における、コンマが一つ消えてしまった。

(2)は「独立節をつなぐ等位接続詞 and, or, nor, but, for などの前に置く」とある。

John and Mary went out, but Tom remained.

(ジョンとマリーは出て行ったがトムは残った。)

この訳文では「ジョンとマリーは出て行ったが」を全体の釣り合いで長いと感じれば、読点を打ってもよいけれども、「トムは残った」が短いのでその読点の必要は感じられない。ここでは、英文のコンマが省略されることがわかるであろう。

(3)は「独立語句や文末の追加・非限定の修飾の語句を区切る」とある。

The heavy rain having stopped, the boys started climbing again.

(ひどい雨が止むと少年たちは再び山に登り始めた。)

They finally got back home, tired and wet with sweat.

(疲れ汗をかいて彼らはついに家に帰った。)

最初の例文では読点は要らない。次の例だが、英文の語順は翻訳の場合は変わってもよいわけで、「疲れ汗をかいて」を前に出すほうが自然であろう。「汗をかき疲れて」としてもよい。ここでも、英文のコンマがいらなくなる。

(4)「直接話法の引用部分を示す引用符の前に置く」とある。

"I will take your name and address," she informed him, "and then, if you please, you...." — Clarence Day

(「貴方の名前と住所を伺いましょう。そして、もしあなたがよろしければ、あなたは・・・」と彼女は彼に告げた。)

この例では英文と和文の違いが目につく。一つのコンマが読点になり、一つのコンマが消えている。

(5)「等位関係の語句を並列するとき、この場合、接続詞の前のコンマはあってもなくてもよい」とある。

John, Mary, and Tom came to see me. (ジャンとマリー、トムが私に会いに来た。)

Alice is a charming, friendly, intelligent girl.

(アリスは魅力的で友好的で頭のよい少女です。)

最初の文では「Mary」の後のコンマは有っても無くてもよいのだから、コンマと読点の関係は変わらない。二番目の訳文では読点は特に必要ではない。「魅力的で友好的で頭のよい」が強く結びついていて、「アリス」に対して長いと考えれば、第二原則の「逆順」を適応して、「アリスは」の次に読点を打ってもよい。そうすると「アリスは、魅力的で友好的で頭のよい少女です」となる。いずれにしろ、コンマと読点の違いが際立つ。

(6)「省略部分」とある。

The ship is for the retired ; the plane, for the business men.

(船は退職者のため、飛行機はビジネスマンのためである。)

セミコロンが使われていて、それが訳文では読点になる。セミコロンを用いたということは、その部分の休止(すなわち、分離)がかなり強く、船と飛行機の対照を浮き立たせたいという意図を示している。それで読点が必要なのである。これは準則1の思想の点に当たろう。ここでもやはり英文と和文の違いが目立つ。

(7)「読み違いを避けるために」とある。

Not long after, he left New York.... (ほどなくして彼はニューヨークを去った・・・)

この場合は和文では誤解が生じないので、読点は不要である。

(8)「namely, that is の後, such as の前に」とある。

At school the boy studied kinds of subjects, such as mathematics, biology, speech, French, and Music.

(学校でその少年は、数学・生物学・言語表現・フランス語・音楽といった種類の科目を勉強した。)

訳文では中黒を使って英文のコンマの替わりにした。「少年は」の次の読点は第二原則による。四つの中黒を読点にすると、構文上の最初の読点が弱められるので中黒にすべきである。

(9)「Yes, No, Oh の後ろに (注意: O のあとにはつけない)」とある。

Oh, stop repeating the same thing! (ああ、おなじことを繰り返すのは止めてくれ!)

本多はこのような場合は「構文上のテンとは別なものなのだ」と言っている。「ああ!」でもいい訳だ。また、「ああ」が「止めてくれ!」に掛かっていると考えると、第二原則を適応したと考えるもいい。「ああおなじことを繰り返すのは止めてくれ」となると読みやすく、第二原則の連鎖防止の機能もあると考えられる。この例文の場合はコンマと読点が一致している。

以上、大修館英語学事典の例文を訳しながらコンマ・ピリオドと読点・句点を長々と比較した。その結論として、「文の文法的・論理的構成を明確にし、意味の表現や、理解の助けにする」という句読法の目的は同じであるけれど、コンマと読点・ピリオドと句点の働きには微妙でもズレがあると言えよう。その原因はなにか。それは、日本語と英語(或いはオランダ語・フラ

ンス語・ドイツ語・ロシア語・ポルトガル語など)は異なった統辞法を持った違った言語であるということに尽きる。日本語はアルタイ語族に属すだろうと推測され、上記の欧米語はインド・ヨーロッパ語族に属する。具体的な違いを上げれば、日本語は述語支配の言語であるのに対して、欧米語は主語支配の言語である。また、日本語では目的語にあたるものは動詞の前に置かれるのに対して、欧米語では動詞の後ろに置かれる。また、日本語には分かち書きが殆ど行われぬという事実もその違いを暗示している。その結果、句読法も違ったものになる。それで、句読表示も違ったものになるのである。そうすると、読点・句点は日本語の一部でありコンマ・ピリオドはオランダ語・英語・フランス語・ドイツ語・ロシア語・ポルトガル語などの一部と考えるのが適当であろう。第二章で指摘したように、明治18年に「羅馬字会」が英語の句読点表示法を採用したわけだが、平仮名・片仮名・漢字という表記法をローマ字に改め、大文字・小文字の区別を導入しても、書かれた文は日本語であるのだから、その文法や構文論に関係の深い句読表示は改めるべきではなかったと言える。漢字仮名交じり文の持つ連鎖防止の効果がなくなってしまうので、欧米語のように適度な分かち書きを採用することが必要になっても、「文の文法的・論理的構成を明確にし、意味の表現や、理解の助けにする」目的を持つ句読法はローマ字で書いても変化する道理がないのである。

### 第五章 句読点の打ち方及び表示の混乱

飛田が既出の論文で指摘しているように、二葉亭四迷は『余が翻訳の標準』(明治39年『成功』第八卷三號増刊「成功城」に掲載された。昭和61年7月初版二葉亭四迷全集第四卷筑摩書房に収録。)で「されば、外國文を翻譯する場合に、意味ばかりを考へて、これに重きを置くと原文をこはす虞がある。須らく原文の音調を呑み込んで、それを移すようにせねばならぬと、かう自分は信じたので、コンマ、ピリオドの一つをも濫りに棄てず、原文にコンマが三つ、ピリオドが一つあれば、譯文にも亦ピリオドが一つコンマが三つといふ風にして、原文の調子に移さねばならぬ」と述べており、ツルゲーネフの『めぐりあひ』はその原則に従って訳されているという。二葉亭四迷はその翻訳の過程で学んだ句読法を彼の小説『浮雲』の途中から応用したらしい。なにしろその頃は、日本語の句読法もその表示も固定していない時代であるから、欧米語の句読法は新鮮でありその真似をしたとしても不思議はない。言語学や日本語学もかなりの成果を上げている平成5年の現在から見ると、そこに一つの素朴な偏見が浮き上がって見える。

それは「日本語もロシア語も所詮は言語なのであり、その意味では同じである。それゆえ、多くの共通点がある筈である」といったものだろう。そこには、構文上の違いなどあってはならぬといった確信が見て取れる。構文の意識がないとしたら、句読点の打ち方には違いがないという確信である。さらに言えば、違いなどあってはならないという思い込みであろう。このような日本語に対する見方が当時の一流の作家の中に見られるのであれば、欧米語の分析から抽出された言語学の理論を日本語に応用したとき、日本語に於ける「主語」の脆弱さが明確になると、日本語はまだ成熟していない言語だとか非論理的だとかと考えたとしても不思議はない。三上章が、『続・現代語法序説』や『象は鼻が長い』などで、日本語には「主語」という概念は不適切であり、主語なしでもきちんと論理的な文が書けるのだと主張して、このような偏見を正そうとしたのだった。そして現在では、日本語は別に「欠陥言語」ではなく、欧米語とは異なった構文論を持った言語であると認められている。

しかしながら、スポーツ・工芸などでは頭で理解していても体はついて来ないということが

よくある。日本語の解釈についても同じことが言えよう。以前からの習慣にとらわれるためであろうし、反省が十分でないためでもあろう。現在においても日本語の読点の打ち方には定説がないと述べた。本多の抽出した原則は見事なもので、私はそれを採用したのだけれど、それが世間に広く流布したとは言えない。

さらに、なにやら現代の日本語において句読点の打ち方に混乱があるように思われる。かつ、その言語の混乱が的外れの句読法の教育に起因していると推測される。なぜならば、日本語と欧米語の違いに留意せず、既に成立していた欧米語の句読法を日本語に適当に当て嵌めた感が否めない。すなわち、日本語に適する句読法を発見しようとせずに、見本となる筈だった欧米語のそれを採用し学校教育を通して教え始めたのだ。上で見たように、二つの句読法はズレているのである。不幸なことは、全くは違わず少しずつズレているところであろう。そして、日本語が欧米語に比較して未熟な言語という偏見がこのズレを合理化した。昭和21年に文部省教科書局調査課国語調査室が発表した点の使い方の十三箇条(文化庁文化庁国語課監修『国語表記実務提要』昭和44年11月 ぎょうせい に収録)を検討してみるとやはりそのような点が認められる。例えば、第四条は「形容詞的語句が重なる場合にも、前項の原則に準じてテンをうつ(例19 20)」とあり、前項の原則とは第三条のことで「テンは、第二の原則として副詞的語句の前後にうつ(例 5 6 7)。その上で、口調の上から不必要なものを消すのである(例5における(,)のごときもの)」である。例文は以下のようなものである。

例5 昨夜、帰宅以来、お尋ねの件について(,)当時の日誌を調べて見ましたところ、やはり(,)そのとき申し上げた通りでありました。

例19 くじやくは、長い、美しい尾をおうぎのようにひろげました。

例20 静かな、明るい、高原の春です。

例19では「長い」と「美しい」の二つの形容詞の間に、例20では「静かな」と「明るい」の間に読点が打たれている。この二つの例文を見るかぎり、文の理解という観点からみるとこの二つの点は必要ではない。外してみよう。「くじやくは、長い美しい尾をおうぎのようにひろげました」、「静かな明るい、高原の春です」となる。このように全く誤解の心配なく読めるのである。例20の読点は「静かな明るい」が「高原」ではなくて「春」に掛かることを示している。もっとも、この読点を打たなくとも誤解の危険がないと判断すれば外して「静かな明るい高原の春です」でよい。この例文に示されたこの第四条のテンは不必要と言えよう。

それなら、何故このような項が出てきたのか。第四章のコンマの打ち方の(5)を振り返ってみよう。その「Alice is a charming, friendly, intelligent girl」の例がよく示すように、このコンマの使い方から類推されたものではないだろうか。第十二条に「並列の「と」「も」をともなって主語が重なる場合には原則としてうつが、必要でない限りは省略する」とあり、これもやはり、このコンマの使い方から類推されたようである。この論文では、文部省の句読法の基準に対する欧米語の句読法の影響を論証する余裕はないけれども、そのような仮説を立てるだけの根拠はあると言えよう。次に、興味深い例を上げよう。『詳解フランス文典』(平成3年、駿河台出版社)の句読法を説明するための例文である。

a. 等位接続詞で結ばれていない、等位された要素(語、句、節)の間では、virguleは義務である。(Virguleとは英語式に言えばコンマである。著者の注)

Les baleines, les cachalots et les lamantins sont des mammifères. (例文ア)

大型クジラ、マッコークジラおよびマナティーは哺乳類です。

Elle ne sait pas ce qui est en elle, ce qui la trouble, ce qui l'inquiète et l'irrite à la fois. (例文イ)

彼女は何が心の中にあり、何が彼女を困惑させ、何が不安と同時にいら立ちを感じさせるのかが分からない。

b. et, ou, ni 以外の等位接続詞の前では一般に virgule を用いる。しかし、必ずしも義務ではない。

Il est intelligent, mais paresseux. (例文ウ)

彼は頭はよいが、怠慢だ。(同書の480から481ページ)

ここで注意をしたいのは、仏文とその訳文のコンマの奇妙な一致である。さて、それは合理的であろうか。まず訳文が自然であるか検討してみよう。例文アは「大型クジラおよびマッコークジラ、マナティーは哺乳類です」となるのが自然である。例文イは如何にも翻訳調である。訳文をそのままにしても、「彼女は、何が心の中にあり、何が彼女を困惑させ、何が不安と同時にいら立ちを感じさせるのかが分からない」のように、「彼女は」の次のテンは他のテンよりも重要である。私だったら「心の中にあって彼女を困惑させ、心配させも苛立たせもするものが何であるか、彼女には分からなかった」と訳すだろう。例文ウは、完全に仏文に釣られたテンを打っている。ふつうは誰でも「彼は頭はよいが怠慢だ」と書く筈である。我々の原則に従えば、文の意味が誤解される可能性が無いから、これほど短い文では読点は必要ない。さて、このように検討してみるとその一致は、合理的なものではなく仏語の句読法の日本語のそれへの浸透を示していると言えよう。

日本語の句読法は欧米語のそれとは違い、故に読点・句点はコンマ・ピリオドとは一緒にすべきではないとの意見にたいして、次のような反論が予想される。

「すなわち、日本語の句読法と欧米語の句読法は確かに違っている。それを承知の上で、横書きのときコンマ・ピリオドを使うのは、コンマを読点の代わりにピリオドを句点の代わりに使っているに過ぎない。その理由は二つである。まず、横書きの場合にはコンマ・ピリオドのほうが読点・句点よりも美しいからである。次に、欧米語が混ざる場合には、句読点を統一したいという実際的な理由である」

先にも引用した『言語生活』の277号(昭和52年、筑摩書房)に掲載された「句読点に苦労しています」という座談会において、編集部の「その点、美坂さん、いかがでしょうか、岩波書店が横組みの文章では、コンマ・ピリオドを句読点として使っていますね。それは岩波さんが開発されたものだと思うんですが」という質問に、岩波書店の校正部の美坂哲男は次のように答えている。「やはり横組みで縦組みの点・マルを使うのはたいへん恰好が悪いということが一つと、横組みというのは欧文に由来した組み方じゃなからうか。和文を横に組みますと、間にアラビア数字が出てきたり、あるいは欧文が出ていたり、いわゆるませ組みになりますね。その場合に、アラビア数字にも欧文にも和文にも記号にも共通して使える句読点というのは、やはりコンマ、ピリオドじゃなからうかというわけなんです」

さて、この二つの論拠を検討しよう。最初のコンマ・ピリオドのほうがより美しいという審美的な判断に対しては、その判断は主観的過ぎるのではないかと言えよう。例えば私には、コンマ・ピリオドの句読表示は醜悪に見え、コンマ・句点の場合は、まだましのように思われる

けれども、読点・句点の組合せより美しいなどとは少しも感じない。だいたいそのような恣意的な価値基準から、国民の文化遺産の最たるものである言語の表記を変えてもいいものであろうか。少なくとも軽率な行為であると思われる。これほど重大なことが平気で行われるところに、広く共有されている時代の偏見の存在が嗅ぎつけられる。

次の根拠だが、便利さで言語を変えることもやはり軽率な行為としかいいようがないであろう。句読点が文の理解にとって少なくとも言葉と同様に——句読点はその頻度が高いという点からみれば言葉以上に——重要な要素であるから、日本語の句読点は日本語の一部を形成していると考えべきであろう。さらに読点・句点はコンマ・ピリオドとは違った使い方をすることが明らかであるから、その形態も尊重されなければならないと考えるのが順当であろう。印刷上ちょっと不便だからと言って、コンマ・ピリオドに変えるなどとは、あまりにも日本語を粗末にしていると言われよう。少なくとも、句読点を適当に変え得べき二次的なものというように軽く扱っていると言われても仕方無いであろう。もし印刷上の不便があれば、それを克服しようという試みによって新しい技術を造りあげるべきであろう。都合が悪いからと言って日本語を勝手にいじるのは本末転倒であろう。

## 終 章 結 論

句読法の必要性は、例を上げながら検討したように文の理解の観点から見ればもはや明白のものとして認められている。それは言葉と少なくとも同じほど重要なものであり、その意味でその言語の一部であると言えよう。

日本語の句読表示は、江戸時代そして明治時代の初期を通じて欧米語の句読法などに触発されながら熟成して行き、1906年に『句読法案』として成立する。もちろんこの時は、縦書きが前提であり読点(、)・句点(。))を使用するという基準が示された。そして、現在まで90年近くの間、その慣用が基準として定着している。

一方、欧米語の浸透などにより横書きが工夫され、欧米語の句読表示であるコンマ・ピリオドなどが使われるようになってきた。そして、横書きの日本語における句読表示に多様性が見られるようになった。すなわち、(1)コンマ・ピリオド (2)コンマ・句点 (3)読点・句点の三種の表示である。

日本語と欧米語の句読法は、その統辞法・表記法の違いや分かち書きの有無などから相違する。すなわち、文の読解を容易にするという大原則は同じであっても、コンマと読点やピリオドと句点はそれらの用法において相違している。しかしながら、日本語の句読法が欧米語のそれに触発されたために、その句読法を模範とするといった過ちを犯してしまった。そこに現在の句読法のゆらぎがあり、句読表示の上述の混乱があると思われる。

句読点は言語の一部であり、日本語の句読点は読点・句点であることは確かである。さらに、コンマ・ピリオドの用法は読点・句点と違うのであり、日本語は横書きにしてもやはり日本語に違いないのであるから、(1)コンマ・ピリオド (2)コンマ・句点の表示法には合理的根拠はないと言わざるを得ない。

欧米語のコロン・セミコロン等の句読記号を使いたいために、コンマ・ピリオドを使用したという意見を上で検討した。実際に便利であり自然科学の研究者の中にその賛同者が多いようだ。欧米語のコロン・セミコロンの記号の持つ機能は、和文に应用することが出来れば意味の明確化や文の簡潔化に役立ち得よう。現在の和文の読点・句点の機能が新しい記号を得ることによってさらに明確になり読解を容易にするであろう。しかしながら、ここでしなければな

らないことは和文独自の句読表示を歪めて欧米語の表示を採用するのではなく、そのようなコロン・セミコロン等の記号と同様な機能を果たすものを日本語特有の記号として日本語の句読法の中で創造して行くことであろう。他の言語の句読表示を適当に拝借していると、日本語自体を歪めてしまう結果になってしまう。明治時代にはシロテンの工夫もなされていたのであるから創意を発揮する余地があろう。この論拠は、日本語の明晰化に役立ち得るといえる点である程度の説得力を持つものの、日本語の一部である句読法を変えるための十分な合理性を持つとは言えない。ただ我々の創意工夫を鼓舞する要因であろう。

横書きの場合、コンマ・ピリオドのほうが見た目が美しいと言う論拠も欧文やアラビア数字の句読法と統一しないと不便だと言う論拠も日本語の句読表示を変える合理的な論拠にはなり得ない。前者は余りにも恣意的であり、後者は便宜的な見解に過ぎない。

恐らく、コンマ・ピリオドやコンマ・句点を擁護する者はこれらの表示が習慣として根付いていると主張するかもしれない。読点・句点も、日本人の習慣であるという点では同様である。この場合は、より定着した習慣を選ぶべきであり、句読点というような言語の根幹に係わる問題に三種もの多様性を許すべきではないであろう。すなわち、句点・読点に統一すべきであり、それによってあたかも縦書きの日本語と横書きの日本語が違った構文論(あるいは統辞法)を持っているかのような印象を拭い去るべきである。

このような、不安定な状態がなぜ日本語において可能であったか。すなわち、この混乱の原因はなにかと考えるとき、(1)コンマ・ピリオドから(2)コンマ・句点への移行が興味深く思われる。ピリオドが句点に変わったのは、和文におけるピリオドの記号的脆弱さに原因がある。そのときコンマを残したのが(2)である。その時、(1)の場合に使えたセミコロン・コロンが(2)の場合には使えなくなる。そうすると、(3)読点・句点でもよさそうである。それなのに何故(2)を残すのか。恐らく、何となく(2)のほうがよく思われるのであろう。何となくというのが曲者で、その無意識のレベルでは、やはり西洋コンプレックスの言語面における表現なのであろう。初代の文相であった森有礼の国語英語化論や作家の志賀直哉の国語フランス語化論の残滓と言えようか。

勿論、現代の日本人は彼らの考えを是認しないであろう。しかし、今だ欧米語に対する無用の劣等感が我々の心の片隅に住んでいて時々その姿を表すのであろう。多くの識者が指摘しているように、人間は母語によって世界を思考するのであり、我々は母語を大切にすることによって自らの思考を磨くことが出来るのである。句読法においても論拠は同じであり、母語特有の句読点を尊重し必要があれば改善していくという態度が大切なのである。他国の文化を学び尊重するとは自国の文化を認識し尊重することである。言語が文化の中核をなすのであるから、他国の言語と自国の言語を同じように尊ぶ態度が要求されている。そうすると、欧文と和文が混ざる横書きの文の場合、欧文にはそれ特有の句読点をほどこし和文には和文特有の句読点をほどこすことがそのような態度に適うと思われる。欧米語に限らず、世界の言語はその句読表示までもその言語特有のものを尊重していくべきであろう。何故なら句読法とその表示法は言語の有機的な一部であるからだ。そうすると、縦書きと横書きとで句読表示が変化するのは許されないであろう。

(注)この論文は、最初に断ったように、平成六年三月に発行された『名古屋女子大学紀要第四十号 人文・社会編』に発表した拙稿『日本語の句読表示について(I)』の続編であるけれども、実際は、編集の都合上、一度完成した原稿を分けて二度に渡って発表するものである。それゆえに、この論文



## 日本語の句読表示について(Ⅱ)

のみでは理解しがたいところがある。その場合は、(Ⅰ)を参照して読み合わせて頂ければ幸いである。

尚、『日本語の句読表示について(Ⅰ)』で引用した川端康成の『伊豆の踊り子』は、河出書房新社から出版された〔日本文学全集18川端康成集〕(昭和四十一年一月発行)に収録された作品を底本として用いた。

また、本文中に引用しなかった参考文献として、次の本を挙げる。

岡崎洋三著 『日本語とテンの打ち方』 晩聲社 1988年12月初版